











謹みて

『鬼百合』一編これを
江州の里土産として
母上にたてまつる

堇月一露生は、余が教へ子なり。學
びの山路に教へ草摘むかたはら、鬼
百合一束、慈母への家苞にとて集め
たり。縣居の主人のたはく、
『言の葉のよしあしいはんは、春秋
のけしきを論ふがごとし。いづれを
よしとし、いづれをあしとかせん。
それ理る人は、はた其の心づからい
へば、つひに盡せる評めあることな

し。』とまことや、鬼百合よ、みやび
をの一瞥にだに、値はせじと思ふも
のから、余は、ひたふるに朧月一露
生が、鬼百合を摘みあつめたる情を
ば、心にくしとなん思ふ。竹の子の
己がたけより高かれと、教へ子に希
ふ心を、序に添ふるなり。

明治三十八年三月一日彦根芹橋の僑居にて

小池孤水

はしがき

産聲の昔、木曾江堤の幼時は談ら
ず。

年甫めて三五の春、縣下二中の門
に入り、越えて翌年九華五瀬巖に轉
じ野球と寐食を共にせりしが、いま
だ一歳ならずして閉校の悲運に會し、
遂に金龜城下に書窓を求めて、身は
琵琶の扁舟に似たり、偶々事あり、

身罪せられて東都に遊ぶこと半歳、
再び湖畔の月にうそぶくこゝに一歳
半、やがて中學五年の星霜は消えむ
とす。

思ふ、此の間得る處餘す處、『運動
狂』の三字のみ、里に土産たらむ者、
何、求めて唯だ『鬼百合』一編、かくて
五年の日月は消えむとする乎、吁。
『鬼百合』は元、孤城人寂びしき冬枯の
野のひと夜、いつしか星姫が闇に奏

づる曲の一つを忘れたるが、枯野に
天降ると夢みて生れたる名、をごろ
しうも美しうもあらざる、例へば星
屑の如き百合の實生の一本のみ。
野の幽宮にいじらしき實生をいた
みて、あたゝかくそだて、やわらか
くつちかふ、その親こそ鐵幹うし、
その親こそ醉茗うし、その親こそ小
池うし、かくて詩の荒野にいしくも、
幽界の奇香を放ちぬべうおほし立た

むの『鬼百合』や

征露第二の紀元節
頗白かひにし彦根の客舎
紅梅の窓に 董月 一露
えるす

短歌

頁

唐くれなる	一
つくも髪	二三
火花	三九
霧分衣	五七
火洞	七三
長詩		
金龜城の暮	九二
繪のなやみ	一〇二

山の女	一〇六
書堂	一〇九
風洞	一一二
櫻月夜	一一六
野に立てり	一二五
献燈	一三〇
鐵幹先生に答ふ	一四三

鬼百合

董月一露 著

唐くれなる

○ 相戀へとや相抱けとや天と地と暮れの彩衣湖
をおほひぬ

○

瀬を並みて相行く船にひとげなしおぼろの岸
に櫻ちる宵

○
詩集いれて花籠さげてひとと見し伊勢は紫美
濃はうす雲

○
穂薄^{ほすき}に兎目よぶ秋の渡し葉屋黄にそめちささ
雲とぶ

○
花白む野がへり寺の鐘ぞ泌む壁にみし世の鐘

と胸に泌む

○
白菊の露のゆらぎに狂へ舞へ蝶に似し子の蝶
に似し世や

○
春寒の征途^{ゆくて}五千の瀛車の窓山に朝日のわくは
我が伊勢

○
金色の雲まゝくに山たかみ山々うかび談らは
む國

○ 祇園ぬけし俤二輛ふたつにほろゑひや町とはいはじ
櫻月と水

○ 簾まけば御苑の牡丹うなだれつ畫を花守戀に
うかれな

○ 戀の猛者もさまの歌うつくしき子春にくき百合の
一つを何んど見む目ぞ

風花の破れ伽藍は死に似たり狐奥津城に呼ぶ
や寂滅

○ 天津日の鳴戸の渦うずに呼ぶあたり孫が軍の艦お
ごそかに

○ 古び沼に椿くだくる隠かくかに輪波すなはち戀や
くだくる

○ 緋だすきにあゆみおくる、鋤の人小道は梨に

夕深うして

○ 黙波黒う白蓮くづれぬ紅蓮おちぬ今か夜の寺
浄土が中に

○ 春昔あこめ姿の稚兒具して詩集ときける堇野
の里

○ み池べに若杜截る傘の人雨の水面に影のうか
ばぬ

○ 月も出でぬ海も開きぬ船やいくつ揖斐の満潮
をあまの唄おはむ

○ 鶏はやみ里は静みて花蔭の鳥屋の夕月人うす
う照る

○ 春雨の菜の花野道靄に一里白馬の君に舍人は
べらぬ

紅梅のはひりの幹の薄みぞれ晴着の孫の門出
の傘よ

○
懷舊の古城の夕べ地は黄に風よあもうは松ゆ
るものか

○
うからやから祭歸りの人はるへり櫻堤の花ふ
いく宵

○
いなめの首途の東南風靄を吹け旗のなかな
る君戸にいたむ

○
古池に藤の花ちるけだしくは地のいづちぞ神
呼ぶらむか

○
かすみかねて君が船のみ靄の外此の鳥廻り海
幸おはせ

○
葦十里穂するに秋の野をそれて伊勢路へなれ
な名古屋午鐘

○ 湯の山の切楠の香に月うすう宿いづる子の頬
のみだれ髪

○ 悔いもすまじ恨みもすまじの山住をなぞ胸い
たむ卯の花月夜

○ 雲をりをり柴戸の秋を山高み野の水白しのこ
る此の身に

橋に人しもだえのそらるなみだ蓄ふくめばさ
てにかゝりき

○ 百合は香に水は調べの天地と二人をめぐる夏
の細舟

○ 飛鳥風皇子よびさます堂ならず藝術の神の古
りし法隆寺

○ 加留佗をへし銀屏寒むのくづれ髪戀のねたみ

を灯ひに守るか宵

○ 奈良知らぬ戀のうつゝを旅に見て董咲く野に
君とたゝゑむ

○ 春夕べ袂に散らぬ紅梅よ濃き紫のみ袈裟さか
むか

○ 神の子が木曾をよろしみ寝たる夜の凝りし呼い
吸がきか紫の靄

○ ひたぶるに今宵思ひの君にゆけ友におくれて
梨に笛ふく

○ 吾やあらぬ琵琶の夕べを吾やあらぬ畔の一人
を又呼びてみし (東より梅兜に)

○ せめてもの此處にの誓ひもろかりし李すもおぼろ
夜花ふる蔭は

ふとしみし我が影垣にあさましき朧月夜は見
るに悔あり

○
天そゝる杉の社にゆりし身か籠の雛鶴空ゆく
姿

○
母よ母が御教の世ぞと悔い泣きし此の夜半星
の崇たかく々々照る

○
ゆるされてほしいまゝなる人ふたり萩にちひ

さき夕星野道

○
立ちつくして松原闇に消けなむとす背子が船路
に灯ともしせむいざ

○
雲幾重青靄大和日ぞかをる神さめ玉へうまし

國原

○
みかへりを秋の灯ひ今は葦になき涙にあふれな
うぶすなの池

○ 花ぞ散るしづ心なの宵の戸やおもわしろきに
心うゑざれ

○ 二十すでに嗟峨の里居に世の子たらず雪解ゆきかの
水みづに黛まゆずみせむか

○ 春昔月あらはなるみ吉野か櫻の小道納言にあ
ひぬ

○ 春にして花ふくらみぬ葢かさゑみぬ蕾つぼみ一つは風に
ゑまぬに

○ 神境かみかたの暮れねぎごとのけはひあり浮み堂湖に
淡し春の影

○ 鶯はうす姫が朝あるの窓とふと梅の花笠かさかつぎて立
ちぬ

○ 霜夜寒み木枯の月に人はなき肩戸かたどのむじむじなに

さそはれたれば

○
白壇のけむり棺をとりめぐるつばみ白梅鶯來
ぬ午

○
着水に六つの女王の繪筆しえて指す野すゑ春
の富士濃き

○
東雲に夕榮雲の空つぎし玉環ありともゆかむ
のひとり

○
木曾と揖斐の川神が此の地をよろしみて眞砂
に生みし里よ長島

○
春は人は魂はいつくへ伊吹嶺の青葉風を暮れ
の戸に立つ

○
京の友の姿ものめく棹の手や蓮の小舟の酒な
き月見

有漏の子の下界にたびし聖の魂か水たそかれ
をゆく桐の花

行く秋を生おひさき先いえぬ燭の前秘傳だふ夜の落葉
戸をうつ

夢かめば百合の香くしきうつゝ床里の近江の
草に夜の雨

血に枯れぬ涙にやせぬ張良が宿世まろびし我

か世ははえむ

飛びつ舞ひつ夜叉の眞闇を縫はむ身とふきま
く風に木の葉おもしろ(二首偶感)

池のもや南殿みなみでんの琴をうづめては絃のみだしを
そゝや花ふる

鈴鹿山はやがてまよひの雲となりぬ夕戸すゝ
ろに花ふくみ立つ

つくも髪

○ 靄の神船けし帆けし櫓と唄と月夜もりゆく龍
の宮居に

○ 一つ一つ雄葢雌葢をさめたる紅梅偉いなる自た
然思くほゆ

帆ぞ走る波は静に日はほがら行かむ何かた世
は暮れむとす

○
旅にして草に朽つべき草薺の鋭鎌の才に泣か
れぬる里

○
秋花の二人が領土寂びゆきぬ木枯かつぎ冬來
むものか

○
駒にして公達いづち落ちぬらむ月の左近のあ

わたし春

○
風匂ふ幻影まぼろし闇にうごめきぬ夜霧ぞせまる白菊
の園

○
七彩の雲は社の島に湧きつ金波銀波の満潮の
渦

○
雨の夜を罪に罪追ふうつゝ窓燈に瘦せの壁に
泣かるゝ

○ 七村に歡聲^{くわんせい}たかう鈴^{かね}たかう野の堂めぐる秋稔
る風

○ 薄月の聖段に立つ秋姿鬼にはあらぬつくも髪
の子

○ 下京や紅屋二十年古りにたれたをやめつやに
富は許せる

○ 花蔭の影の幻夢なりしその夜の幸よはたよみ
返る

○ 藤の花あへて鵬鵠をあやつらず彩羽を洗ふ緑
春雨

○ 野の土にいつくし戀の神あらむ田鼠^{むくら}の洞は堇
門守る

○ 我れ歌に快樂^{けらく}の相^{すがた}うき相そはむしばしを興じ

て足らず

○ 若うして妹山背山悶もたえたり花幾返りさへぎる

ぞ川

○ 宵の堂の繪像半ばを灯ともしよせて秋海棠に秋の雨
見る

○ 野の庵に朽ちむ運命のなごうかる友が詩集の
我が名いたむか

○ よせぬるは追ひかけぬるは何ぞなにぞ鐵くろがねの鎚
目に落ちむ今 (病みて)

○ 朝窓に化粧けいしょうの髪の長々し紅の御口に歌よきよ
妹

○ 出現かみやあらむ靈驗しるしやあらむ神燈かみか神前かみの人に
そゝぐ糟雨

靄の神と嵯峨の一夜を花にねて和樂つきぬを
京明けの鐘

○
獨身は戀の洞うらみに戀の暗に呼びてをのゝく名も
なけふりぬ

○
鶯は梅にさそへど今日の日を今日がとざせる
春窓の人

○
池に淡きを君と我が影おひて來し月野白梅皆

詩にのらぬ

○
鶯に今の山居を泣かれては珠のひもさげし籠
の窓の春

○
橘の雨夜を偲ぶ故宮こみやの譜をぞやその琵琶緒の
きれにけり

○
夕榮えに白藤ちろう又しきり遺愛の鶯鴛の靄
ごもる池

○ 細殿を雪洞はべる姫具せる御袖にかゝる雪な
らし吾

○ 欄干に繪扇かざす舞の子よ夜の夢いかに春を
行く船

○ 國主よりたびて幾代の此劔劔ぬぐふに時は依
せずや

鶏ないて霜の氣うごく朝戸出や梅の垣越し麥
青む頃

○ 我か名よぶ緋桃の裏の夜ぞいたまし月を招せ
む宵ならなくに

○ 姫御子が室のもだえを奇火たく焔の宮か落ち
る日の影

○ 草は草のちさきながらの花ぞ持て春にくいか

な牛のふむ牧

○
そがひ見る圓山比叡雲もなし大原少女京へゆ
く春

○
雲も見ず小河にそへる二人なりき柳の糸によ
らむ二人なりき

○
黄金雲の古堂うづむる谷若葉聖僧ひじりたゞならず
咒の寒き夕

○
詩の僧に繪筆ゆりての堂籠り今日も落葉にほ
そし秋雨

○
狼吠おほはえに斥候もみけうとき山越や有明月のやゝかた
むきぬ

○
麗しう夕焼はらみ雲はらみ白帆入江に君がど
つぎの

花輿に籠かきあらず人わらず櫻吹雪に日は落
ちむとす

○
春と匂ふうつ、古城ふるきの緋櫻か片枝さびしう小
春花さく

○
花の野に生れて子らぞまごかなる春のわかき
に月清き庵（翠月其愚と野の吐月庵に居して）

○
者のこゑしひてうかゝふ者のこゑ梨の木蔭に

すだまなく夜か

○
くしとるを君笛に待つ月の門蚊遣流れぬいち
はつの花

○
靄まの海の戀の小舟を封じたりとはに沈みて眞
珠たまとこらむ

○
君黙して聖教のこゑ遂にあらず世はどことは
に暗なるもの乎

火 花

○ 姫つ神の化粧けほひを御手の紅べにそれて花藻にしみし
胸のゆらめき

○ 夏の神の熱あつき吐息といきのくれなるの紅蓮ぐれんと凝りし
花のもだえよ

○ 菅笠の唄の願ひかそれかあらぬ黄金鈴ふる瑞

穂足る秋

○ 魔を咒ふ狂女の影月に長う霜の氣深き社ほこ
すぎ

○ ひゝかすや野の石かくて火花ちるに情の鎚の
なごひゝかすや

○ 鉦さきに毒さす神を咒ひつゝ敗けせぬ國と敗
けてある國

地の闇に白う點ずる落椿星とをのゝき天仰ふ
かれし

○ 湯殿いでゝ百合にそと見る蝶と人袖長いかな
神園さながら

○ 山つ姫の葉守の神と汲む御酒か木々紺青に酔
ひなかす雨

○ 花園の花のいづちをかざしむ窓夢咒ふみだ

れ髪よ君

○ 秋ごもる法華堂いでし興いかに竹に白衣びやくいの嗟
峨の入日よ

○ 罪に病まね世を憂ひては詩やはなき山の落葉
の湖にちる樓

○ 叔母やみて雲影寒むの柿紅葉日貢ひつぎ送りしや、
暮の村

○ 葬野はよりのに回向は絶えず樂やます西に五彩の雲を
吐く山

○ 思ひ子は初遠旅の野を西へ戸はたそがれの花
ふくむ月

○ 黄銀杏の風にこぼる、秋の堂今夜こよひこだまの鐘
うつ月夜

山姫が龍にゆるさぬ情ゆえ龍が打手とよする
野嵐

よき人と泉の森の百合の床に戀の眞晝は鳩に
ゆづりぬ

雷の魔神になげし彈丸落ちて野にかふくらむ
精蛇苺

藻の花に墨の香匂ふ鳥貝むかし流れし戀歌の

靈か

稻の秋を鐘のたゝふる聖堂や大樹銀杏にたそ
がれの村

落ちのびて繪に世をわぶる離小島幾世ねざめ
の磯の荒波

煩悶つゝそらゆるゆく路すかしみれば小百合の
雨に星のひろがる

○
雲こえて笠に月みる木曾の旅雁きくらむか長
島に鳴け

○
高汐に虹の浮橋天かゝれ君が希望の今ぞ渡米
の

○
戀の世に戀せぬ者は痴漢しねものといづれしれもの袂
はなさせ

○
落椿の沈黙に寒き蝶に似る姫が捨てにし葉牡
丹の扇

○
花婿の里の祭を叔母と來ぬ岡の直路たぐちの藤白き
門

○
七彩の雲に釋尊が輦をふるせ不忍池の蓮のあけ
ぼの

○
祝盃に妹ぞはべるをたゞよひし海の磯船とき

な疾風は

○ 御袖とりて旅にやらじは夢なりき盆の十五夜
秋雨の降る

○ 彦星の戀に棹さす船天降り野にしほみけむ花
の晝顔

○ 高殿に王女もまじる銀燭や舞の花傘袖の緋ざ
くら

○ 緋牡丹に珠か露かの靄の戸や鶴王に似たり蝶
神に似たり

○ 船歌の波にゆらぎのはてはいづら磯薄月の風
ねたましき

○ 旅順あたり靈雲もえぬ風みちし龍馬秋なく大
松の宮

エンゼルの優手轉びて野に落ちし球の魂えし
紫桔梗

遠祖の劔二十をうけつかず母袖に泣くちさき
世よ繪師

南山の雲心なき秋日和おひて來し菊君が野の
水

露の殿に樂師蟋蟀燭をえて廣間に滿つる樂や

寂寞

○ 稻の波のたわゝくゝに鈴みちて端唄戀唄語ら
ひにくき

○ をごろしきぬば玉の魔に鎖されて黄泉のいき
を苔に吐く岩

○ 秋の野や萩が花妻の後朝のうた菊桔梗荳荳尾
花

一夜長夜一夜うらみの山の宿有明月夜鳴くほ
とゞぎす

○
金色の鳶舞ひこみし杉木立夕影刻む天のあら
ゝぎ

○
金の扇に今日も禮讚彫りて暮れぬ隠者十九の
行く秋の堂

○
京の子の戀の情のこちたさにそむけし頬か花

白董

○
醜との身に何んの願ひか董姫の御すそはらゝす
魔の手そよ風

○
靄にうすき森の泉の女の神が腰おほひさく花
よ白百合

○
にことゑみて思ひの影によりそへばをぞくす
折れぬ姫百合の花

○ 星姫の谷の調べにきゝほれし靈世に生れぬ峽
間山百合

○ 白百合は森の黙想しごまの祠ほくらいでゝ泉よろしみ立ち
ませる神

○ 寂寞の奥津城領するこれが王者をどろが中の
鬼百合の花

○ 小百合花毒さす虺の一日ゑにしとはのゑにし
を君にうたがひぬ

○ 塔に白梅寒さうすみぞれ詩僧やせたり紫の袈
裟

霧
分
衣

○ 雨の夕を緋櫻ねたむ簀の人筏の唄は咒咀じふそなら
なくに

○ 金色のちさき蝶かや銀杏舞ひし昨夜よべ女の神の
月のすさびに

○

星落ちて花野虫のみの宵の怨み石に怨せど石
はいらへぬ

野の星に追想の卷みだれては卷をかなでの歌
の秋虫

草にねて寫生生の筆は野に捨てつ繪血に浮ぶ
雲萌黄なり

ひとのいふ後妻ねたき吾ならずさても野守が

唐菊の花

草堂の詩興つきては神の誦す秋夜しづけし釜
の湯の歌

米とくと紅の袖口に小川うき秋を蠶飼の粟お
つる里

入洛や青葉木立の朝月夜籠なる人に供人ねほ
き

○ 悲みとはあゝたゞ一日この一日血もて染めむ
の彩たらぬ日記

○ 京を西へ三夜の旅人朝いで、山の何くぞ野の
はかな雲

○ 稚兒具して紫帯の優男やさなぶり袂にひろし琵琶の
春風

雪かろう正月ひつぎを興の山ごもり梅折る笑みのに
くし丸髻

○ 月ヶ瀬や梅なき船の宵闇夜春の落款ちうかん老木らうぼく緋ざ
くら

○ 故里は再び見じの夕野すぎて多度山たひやま嵐身に泌
まざりき

○ 親を泣かせ吾も泣かるゝ旅にして呼ぶにをの

く年の二十よ

○
銀燭に牡丹花やぐ花園の花の眞秀ほんしゅうを君にいつ
かむ

○
踏み迷ふゆくへはてなき道に泣け涙の熱に雪
解かせむかや

○
俳句師に紅屋もまじる月夜小舟舞の子のゑみ
戀ひなしにして

○
花あひに病む白鶴朝を園に逝こきぬ鳥屋紫あひの春の明あひ
霞かすみ

○
華ガスは韋にゆらぎの渡し小舟半里は近し住
の江月夜

○
人の世の東のはてに國ありて食みぬ食まぬの
いさかひありと

○

道の子は道の名ゆゑに親知らずわかき希望を
神か手による

○
天地に親をし知らず妻知らず此の身二十を道
にやむ春

○
一朶ひとたの白雲月の梅に落ちて和郎わろうよぶこゑにく
し金鈴きんねい

○
冬の神のこゝに威嚴の一聲にさては木立の肩

そびやかす

○
菊畑に圓山浮ぶ秋は足れ暮野の影はさて寒か
りし

○
行く春のまごはし雲に杖立てぬ鐘に花ちる黒
谷の塔

○
浮く花に思ひやりつゝ古揖こいび斐ひの暮を笛ふく緋
櫻堤

○ 舞の子の鸚鵡あやつる藤の園北青雲軒南菜の花

○ うらぶれを歌にやむ夜をくだちぬと衣まゐる子のなごうるはしき

○ 日の子去りて白梅少女たゞわびぬうまし紅梅春はあけぼの

○ 日の皇子が戀歌つゝる梅の春繪の子うらます夕べ戸に凭る

○ 机に頬のうつくし詩興みださじと呼ばずてたちぬ白梅の窓

○ 紅梅の春のぬるきにぬしや靈飛ばむ姿の紙の折鶴

○ 春の靈たそがれ月の山にわくか梅萬陀羅華鶯

如來にょらい

○
ボール投なれば鬼と呼よばるゝ鬼の手に師の目す
かさむ色紙やはあらぬ

○
薄月の沈黙しんまの大地おほち地ひびきて墓にこえあり人
の香ぞする

○
菊見ると雨戸くらする裾とりて懐紙まゐるが

燭ろうにあえかなる

○
木下闇白つゝじ咲く花蔭なげに毒吐くひきの吾に
やはあらぬ

○
絲遊いとに彦根城ひこね浮く菜種なづな五里詩集の袖に春の琵琶びば
濃こき

○
秋寒あきを萩實はぎにいりし南禪寺なんぜんじや裳裾なごかいどる傘
に雨見あめる

○ 離れ屋にわかき大臣ひとが來ます日か桔梗ききやうとる手に思ひみだるゝ（京の三笑氏が繪に）

○ 歌にきく『藝術は信の又の名』と錢の讀經の佛にふさはぬ

○ 珠のひもは秋にゆらぎて鈴虫の魂のぬけがら草かれし籠

小春日を羽蟻ひめが黃胡蝶の戀のなきがら葬りに來る

火^{ほむ}

洞^ら

○ 彩糸のみだれときわぶなやみとやみ胸ときえぬ繪のなやみかや

○ 精^{せい}の芽に新魂あもり黄朽葉に老天がける森のつぶやき

○

夜車のきしり何處ぞしづまらず聖を怖れて木
を下る葉に

○
石に泌む美しいかな雲と眸秋風云はぬ暮野の
人よ

○
小勢まけて今か大勢のよせに似たり君を思ふ
に狂はるゝ秋

○
魂燃えて焔にたへず吾ぞたへずまろばむ雪の

朝狗とこそ

○
日の大神サタン打てとてそとたびし神將の冠
黄金日向葵

○
透帳に興宴雲むす春の殿欄の戎衣に星影あか
き

○
燈燭して姫庭傳ふ宵の戸や胸の火洞か奇火ま
かつみ

指させば少女口籠る菊日和菊のをごり香戀の
むせび香 (以下三首 高宮の菊花園にて)

○ 茶を召せの聲に匂ひにのこしおきて菊がとら
へしいじらしき君

○ 朝に夕に神の香満つる菊の園氣精こりてかは
しきをどいひ

○ 美しき罪歌はずや夢ならずや詩の集に見る菊
に云はずや

○ 金風すかぜは男神の悲歌の曲の譜か秋花あきばな姫の額のお
もたき

○ ミユーズ姫が干花の露に紅とける彩筆たびし
詩聖鐵幹

○ 月の戸に杯すてむ殿ならず雲くもゆく雁かりによきう
たをめせ

○
亡びぬれば世の名え知らぬ道知らに暗ぞと迷
ふあゝたかき暗

○
逢瀬ありき再び『夢』を呼ばむかな神うらみしを
涙古りしを

○
歌口の花野吐息に雲現じ吾に眞白の翹生へけ
り

○
君すでに二十の眉根堂にわびぬ春金像になか
るゝ宿世

○
聖堂の鐘にゆらるゝ朝居ふすまふと口とけし
歌ながさかな

○
灯包むでまどる興わく小菩薩に戀をな説きそ
秋夜物語

○
山すみを堂をうづむる紅葉ばの月夜小道に和

賛誦する子 (二首攝津の僧董露)

○ 功のむくろは土に返らずや魂は野の花夢をこ
らすや

○ 裏濱に詩興の客は歸り來ず月の尾花に狐ねる
院

○ 姉妹がちさきたわれの燭火ほんに桔梗野のこえて
まゐるこほろき

○ 月に耻ぢ口にこもる名おひて來し干花こほろ
ぎ野はうつくしき

○ 山ごみの法の三年を都にて春を昔の歌ねたみ
ぬる

○ 春風の市に生れし歌の集わづかに戀のもだえ
とくもの

銀燭や詩の會期しての春の人牡丹の袖に色紙
ひそませき

燭きえぬ星夜花ちる汀白し管弦の謠の波にゆ
るゝ船

美しき罪を吐息の濃青雲牡丹ようけし罪をい
たむか

魂の力夕野星なきにほしや時異香を吐くよ仄

白き花

繪の堂の苑の牡丹の露泌みて孔雀産毛ぞ彩羽
つくるへ

野煙に彩雲暮れぬ稻の秋の行けど行けごもは
てしなき國

手桶さげて残んの月に尼ぞ歩む花ふる嗟峨は
まだ夢の國

○
み吉野の櫻の月をよろしみて花にぬる夜は眉
に露おかむ (旅の君に)

○
秋雲は干花の葢に露よびぬ勢至を背の人は南
へ

○
聽法に書院ぬけむすみくしつき藤に夜鐘の螺
鈿てんの龍女

振袖に茶の湯をはちし夜の頬をとかむによわ
し石楠の花

○
奉天は猛者もさ三萬の血に似ずや燈下地圖ともしとく人
眉しろき

○
宵の酒のうはなりねたき京なまり伊勢路の旅
の春の宇仁館

○
白萩の竹椽にながき草堂や京の繪筆を垣間見

る子よ

○
ともすれば和賛みだるゝ暮場道念珠くる尼は
落葉に消えぬ

○
紅葉狩暮の龍田に美女やえし雅兒が二八のお
ものやせやう (東の至文に)

○
愛悼の詩の子のなやみ雲とこり今宵の月夜空
にひらかぬ

○
三千の衷歌のひゞき力えて空に渡れば空なり
ごよむ

○
さびしらの俳句の三年のおとづれを月に遣は
せ雁か音文筥 (三首正規三周回忘に)

○
花かめば花なへたりき石うてど石云はざりき
あゝこの一日

卷雲に金星ひかる君來むか糸瓜の棚に秋の空
見る

○ さびしらにうつし繪いだす戀ぞ古る蚯蚓めづの秋
に雨夜くだちし

○ 白檀の煙にわびしみくしつき聖母七十七神と
仰ふぎぬ

○ ぬば玉の黒髪すぎて肩に長しよざし戀男の戀

つのれとや

○ 花蔭のうつくし罪におびえつゝ文筥びやくこまゐるか
渡殿にして

○ 宮城野は小萩が露に月更けぬ白狐びやくこ太刀帶き登
城にまかづ

○ 秋花の一つを撰りて謎こめしいつくしゑみに
迷ひとけにけり

○ 戦ひに美男びなんされ男は皆めされ去年のおもざし
なき伊勢神樂

○ 雨ながら日影こぼるゝ野の宮に狐嫁こねいる紫陽
小道

○ 荒神の靈白蓮の花咲かす木の下噴水いづみかめば骨
なる

世をすねて野の花守に朽ちむ身ぞ詩の淵明を
たかしとよばる

○ 鯉はねて金波きんぱ渦うずわく神のみ池夕べかざろひ河か
骨ほねかをる

○ 酒氣たかう六軍の興みなぎりぬ力ある哉靄の
野の朝

○ 崇拜の聖壇の香に古らせては秋法華堂に語ら

はむ誰

○
かさこそその足の落葉の趣ぞいため暮野の墓に
呼ばむ名やなき

○
香ぞ残る伏戸に入りてさてまどふ桃の垣根に
君をぞまどふ

○
秋晴を銀星おのれ風たてぬ紅葉神山しんま黙思まつめ
たき

○
彩雲に金堂寒むの暮の風菩薩ゆれさす紅葉ば
の秋

○
四代目を此の子は男子玉の子よ養子に泣かむ
人の子の君

○
われ死なば又天地にはらからの又なき兄と呼
びて死にし君

○

二百餘里父のみ國は間にて母のなさけの旅に
死にし君（廣橋君を悼みて）

金龜城の暮

南につゞく從者ヲを卒ルて
美濃、伊勢、近江三國の
國のしづめか銀の
冠いたゞく山つかさ

伊吹は北の王者なり

白雲わけて先ばらう

これは尾濃の平原に

蕭然として鋒を持つ

越前、加賀にかける山

烏帽子とばかり靄に見る

波路のすゑを金色の

雲は流るゝ山脈や

比叡に向ふ比良の山

紺青とかす朝雨に

近江の琵琶はみどりなり

葉に宿る雫、花のつゆ

岩水清水あつめつゝ

澄みてながるゝ芹川よ

近江の野良をうねりく

愛知川能登川湖に入る

神や摸せし近江富士

姿は雲の隠さゞり
滋賀の汀も石山も
小波に浮く島の如
いづれも夢の自然の子

黄泉の醜女が毒を吐く
そのくれなるにそめられて
巨人とたてる白石も
榮えなき跡よ、落つる日と
墓に落ちゆく多景島や

星に槽を押す水夫の唄
琵琶湖に松の落つる處
こゝは荒磯の磯山の
多景を戀女と顧みて
海の底ひに手をやとる

若葦洗ふ金波銀波
洗へと消えぬ辨天の
赤の扉に滿つるとき

松は神代の樂あげて
風、船人を恐れしむ

大比叡嵐、比良嵐

伊吹嵐の吹きよせて
彦根におとす夕嵐
落花に暮をとざす里
時の洞うららに寂びにけり

三月、雪の櫻田の

血潮が染むる白壁の
孤城の影は湖に落つ
日の入方に偲びては
遊子、白帆をかなしまむ

松ゆるる風に城を抱き
桑畑まじりの瘦町を
守りて高き石垣の
月なき宵の月見臺
少女の影のあやしまる

灰色の空うるみたる
墨繪の如き西の山
伊吹も暮れぬ琵琶暮れぬ
星に鐘うつ木下闇
人は一步を地に下る

繪のなやみ

たいたい 橙
あいらい 蓬萊、
みかづみ 鏡餅の

神棚照らす宵の灯に
白き鼠の尾をふれて
消えたるまゝに夜は更けぬ

毛氈青き文机に
つらづゑつける歌人の
初春の詩に倦じては
繰り返しみる繪葉書よ

紫、 萌黄、 紅に

戀のこもれるこもらざる

夏、青淵に一つ一つ

散りゆく百合に似たるかな

こは活人か髪ときて

刻める如き唇に

吾にかがやく眼ざしに

胸のうごめき覚えけり

神の思ひの麗しう

夢に浮べし天津少女

面影そぞろ現じたる

さても繪筆のけだかさよ

山の文

胸に得むには我が胸の

あまりに小さく怖あり

ゆるきいでゝは天そゝる

富士の煙と消ゆるらむ

蓋に泌みいる灯の如く

花にうるみし眼をあけて

母が進むる

新妻を

なほもいなまむ

我が身かな

山の女

たてぬきの絲よりし

玉繭の彩知らぬ

親の手の新衣に

蛹にし罪持たず

山せまる谷あひの

山が吐く氣に生れ

木下蔭ほの匂ふ

巖に咲く白き百合

二十今戀ざかり

つやうすき山ことば

名木を焚きそへて
冬の夜を物語る

よき衣をたゝませて
ほこらしう都とく
旅の子に何にの興
つゝましくすべり出づ

木枯に落葉舞ふ
扉うつ音やんで

相宿の人もなき
山ごみの湯の山の宿

畫堂

午の鐘小草に泌みて
農夫らを野へにうながす
冬枯の緋桃の道は
麥青う畑あたらしく
鶏ないて平和の村

村はづれ野の開く處
かけひあり水仙の垣
繪師のすむ堂の方丈
朝日さす明るき室の
白梅の障子に匂ふ

佐保姫の輦くるまに乗りて
光の王子野に天降ありけむ
深山より繪絹の梅に

春なれや香に鳴かむとて
古き繪の靈よみかへれ

花笠をかづく姿に
春の風彩羽を織りて
リボン美よき子の手ずさみの
折鶴にいきあたゝかく
舞はむとす花ちろうまを

鬚ひげ白う頭巾を取らぬ

繪師の君何にを夢みる
春の精筆に封じぬ
畑低く伽羅の薫じて
人の世は影にぞ似たる

風洞

伊勢と尾張の國境ひ
港に注ぐ大川の
木曾と揖斐こそ流れたれ

揖斐、養老に源す

傳へ言ふらく此の河の
源、溪の斷崖に
伊勢と近江を貫ける
風が領する洞ありて

近江より吹く湖風に
昔、國主が狗追ひて
七日七夜を經し朝

彼は恐るゝ、抜けたりと

驚く、扉醜岩の

先づ風洞に入らむとき

肅殺の氣は面に觸れ

これ草の葉も萎むらむ

人の終焉せまひの呼吸の如

折々息吹く氣のゆれて

頸に顔に冷ややく

天地此處に亡ぶかと

仰げば落ちむ洞の岩

伏せば燈火消えくゝに

冥府よみに落ちゆく道と聞く

私やみの深きかな

鐘乳石の音たてゝ

水に落ちたる戦慄せんりつに

あなやと立てし聲の下

底なき洞に燈火は消えぬ

櫻月夜

さるひこの滋賀の旅より伊勢なる

歌妓に櫛送るこてうたひたる

上

繪の如 小さき町の影

南にひらく伊勢の海

愛宕は山の春殿の

若葉の月は朧にて

櫻々にひともして

燈籠おほき春の宵

石像の鳥あたゝかに

色を帯びたる噴出水

燭に花やぐ緋牡丹の

長袖姿ろうたけく

羅漢も色彩に動くべく

山はつゞみにごよみたり

天律舞衣すべらかに

樂に伴ふ夜の宴

扇や人をはなれたる

人や扇にかくれたる

更科姫の紅葉狩

袖ひるがへる蝶に似て

風にうかひて地にあがる

陽炎を捲く姿かな

袖ふる袖の春の風

愛のみだれに渡りては

はたと壘にものおとの

小さき楡こそ折れてしか

和樂湧くなる春の夜を

もし天地に情あらば

霞たなびく花蔭に

二人が戀を封せなむ

つきさき下る下り坂
さゝやき交す懸想の子
止る水や行く水や
木立に闇き別れ道

下

湖國を圍む山近み
雲が呼吸いふく伊吹嶺の
麓の町にさすらひの
琵琶の小舟に似たる身よ

神ながら吹くあさかせの
伊勢より花は遅ければ
今をさかりの櫻月
昨日の春の新らしき

吁、姫としも相逢うて
美し影の身に宿り
沈黙しんまのうちによみがへる
彼の夜彼の月彼の花よ

唯、或る宵のうたげにて
強くのみへしこの年を
うたてや何にの泣かしむる
氏ある家の生れながら

二島、二萬の民を卒つて
祖先、國主と戦へる
佛に威を得し家と聞く
あまり變りし我か世哉

彼に日暮れぬ琵琶の海
鐘の月呼ぶ金龜城下
ポルト、ポールに名を得てし
友は恐るゝ『鬼』なるを

彼に千鳥を蒔繪せる
螺鈿らてんの櫛は古りたれど
姫がうれひの折々を
髪ときあげし櫛にして

東に走る青峰の

黒雲わけて峰越えて

伊勢に波きく彼か魂を

小櫛に秘めて送るなり

淡水おほみふきくる春風の

人こゝろなき近江路の

旅の館の櫻月

今宵静かの風よいつちへ

野に立てり

朝明がうつ天の樂

秋の野ひゞく稻の鈴

天と地とのほがらかに

朝のこゑのあけそむる

黄葉銀杏の近の村

天さしまねく松の村

形繪に似し野の家の
人、詩の領に安じぬ

森の泉に靄立ちて

女神が裾をおほふ如

伽藍は高し聖堂は

狭霧の上に浮びけり

霧のゆきゝの薄く濃く

見え隠れする塔の

光に影をきざませて

さながら天のうてななり

七つの里を司る

大野にわたる鐘なれば

渴仰あつき村人に

胸あたらしき響きかな

雲の櫓の高うして

投ぐる金の矢銀の矢の

矢の根そろへて射落せば
霧は消えゆく大野原

胸に佛土を浮べたる
禮拜凜々しき僧の如
野にたつ巨人、稻の穂は
遠く包みて皆黄也

默然として野の土の
神代の脉を此處につぎ

地の香古きに礎を下し
白壁何んの威を示す

野は七村に生れけり
七村は野に生れけり
此の野此の村領として
稔を守る野の王者

雨に嵐に寂びれたれ
靈雲、棟を去らずして

逸氣を守る一つ松
門扉、開きし音もなく
神秘の幕をたれしまゝ
七彩匂ふ秋の野の
夢と感ずる天女堂
聖なる寺は野に立てり

献
燈

一

上皇おほぎみの大殿ぬけて
被衣かろぎ女の微行も出でぬ
雪の夜を前裁明し
森の下奇火くすびぞ燃ゆる

二の鳥居くゞらむとすれば
火花ちりぬ火花は消えぬ
眼は鏡、髻は白銀

火を吐ける口は裂けたり

上皇おほぎみの撰りの譽れに

満月と引きしぼる弓

矢を番ひはなちもやらで

武夫は闇にまざれぬ

『怪物』と襟をつかめば

老僧の神に灯まるる

献燈みろかしはかくて燃えけり

雪の道足跡しるし

天盖ふ大闇の下

厭せらるゝ櫟、常盤木

椎木は地にや伏し

杉木立、献燈みろかしさむき

一一

白銀しろがねの珠か碎けし

白雪は世をば封じて

関からいの千歳ちとせにたかき

森のこゑ苔の香蒸す

きら／＼し雪は光れり

人とはぬ宮は寂びれて

夢兇ふ葉蔭の鳥の

醜鳥しどりの奇しき聲しぬ

千歳立つ巨人の姿

杉の精出で、戦ひ

雪をなげ闇にみだるゝ

戦ひの中をぬひゆく

目蔭めかげして闇うかゞへば

献燈みあかしの小さう細う

少女子の胸の悶えもぢの

さても似る奇火くすびなりけり

三

變化けんげとも人ともあらぬ

地の影は瘦に萎えたり

つかねたるおごろの髪の毛

木下闇の献燈みあかしに照る

献燈みあかしに歩ます行かず

そゝろなり口に咒を誦す

病む人に百度通ふか

母のため百度詣まごつか

懐みに何なにをかさぐり

献燈みあかしに何なにをか笑ふ

皇軍みいくさの國の戦に

幸をこそ君祈れるか

母に泣くも君に泣かむも

献燈みあかしは神と現はれ

その胸を安けくいやし

夜の床に送り返さむ

四

板戸もる夜の灯もなき

寂寞の村里ぬけて

熊笹の小道を鳴らし

宮に來し跡は黒雲

吐息つく息さへ見えて

献燈にとく小風呂敷

繪卷物、金銀、寶石

數々の美きにゑまるゝ

數々を胸に收めて

思ひ知る神の御惠

額づきて額をあぐれば

献燈のたゞに光りぬ

二十年の夢よりさめて

身の性に我と泣かるゝ

古杉の今新らしき

空に立つ影驚かる

闇の彼方啓示の聲す

腰の劔、地に投ずれば

献燈ぞ神と現じて

まかんづる姿見守る

五

ぬばたまの闇夜は深し
羽毛の吹雪精氣厭しぬ
木すれして繪や燃えむ
風荒き深山思ほゆ

厳しき階段の上

闇の中に祠は開き

おのづから靈はまひいづ

大杉の木下神風

献燈の一つは消えぬ

荒涼の葎々迫り

夜の氣に身はちいまりぬ

神境の聖なるかなや

野の人に星の數たり

旅の子に夜の方たり

あるは音にあるは形に

献燈みちかじの永久とこほに世を守る

讀するに歌もひゝかす

まかでむに足も進まず

拜殿の吹雪にうもれ

襟寒ふ黙思に耽る

鐵幹先生に答ふ

○
山にして都の秘事の歌しらす猿のこゑと思せば足らむ

○
ひと卷よ母にさゝげむ里土産詩集といはず詩筆の草紙

○

今をこり我はほまれにひやゝかの御怒いなみ
ぬ思ふ事あり

○
詩の集に世をたかぶりは二十なり世の罵りに
慰籍かはむ子

○
何んなれば己れ己れを思ひえぬあゝ狂ひ子を
あはれみ玉へ

○
『罵りは千歳に高し喜びは一代に高し』わがまご

ひかな

○
いにしへの大人は云ひぬ嘴の黄なるあひだは
模擬歌を

○
鶯の澁ぶるは谷の初音にてよしてふも人あし
てふも人

○
雛の句に歌の長者を叫ばれて翅そらなりかけ
らばいかに

歌の子が歌の巧妙たくみをまねばむやたゞくごもりのくごもりの歌

鬼百合跋

松原至文

わが詩友、球友、艇友たる菫月一露君、その中學時代の遺れがたみとして詩集『鬼百合』を剗刷に附す。

われと君とは宗教に其立脚地を同うし、國にその出産地を同うす、木曾伊斐の長江、滄溟の藍に溶くるところ、君と我と河を對して其の堤畔に生れ、われ五瀬巒を出で、東上せしとき君は五瀬巒に入り、我の漂零して金龜城畔に遊びし時、

亦君と校を同うしき。

君は仇名を『鬼』と呼ばれ、我は『仁王』と呼ばる、共に幹軀長大の横暴兒、君は詩に巧に、野球に秀で、短艇に強く、相ひ携へて他の球艇俱樂部の攻撃に出征せしもの幾度、若し夫れ琵琶湖の淡水桃花の風に温むで、波上の櫂聲おもしろく、比叡比良の連山が楕圓形の緑冠をミルク色の低天に擡ぐるを前景に望み、農夫の鋤影や、乙女の笠や、耕牛や、駄馬やが點々として、東江州の平蕪につらなる菜花の黄波に出沒するを背景に負ひながら、

五

オール片手に詩を合作して行く春を弔ひ、秋立てば天主閣の櫓の上に行く雲の色白くして、琵琶のさゝれ波は城の石垣に金聲を振ひ、森には暮寒を鳴く狐の聲怪氣を帯むで御溝の水に落つるところ、鳶這ふ石に腰かけて共に詩集を繙きし君と我との交情録に到りて長き幾頁、君も消し得ざるべく、我も拭ひ能はざる深き腔裏の記憶なり。かくて『鬼百合』は君か産出し哺くみし、愛子なるべし、しかも我亦この緑兒に對して骨肉以上の情無からむや。

君かボールは速力迅からざれども力強く、君が
オールは敏捷ならざれども堅實にしてよく長
途の競漕に堪ふ。君か詩また昂韻にして勁響、字
々、句々、白紙の乾面に確き脚步を占めて、微顛だ
にもせず、之れを他の柔聲浮響、殆むど婦女子の
手になれるよりも纖弱なるに比すれば眞個丈
夫の詩『鬼』の歌たるに背かず。君江州を出づれば
將に球をすてオールに遠からむ、茲に詩の爲め
に心力を傾集すべき君が前途を祝し、『鬼白石』の
健全なる發達の餞として、以上の贅言を費す、矣。

明治三十八年三月二十二日印刷

明治三十八年三月二十五日發行

著作者

伊勢國桑名郡長島村又木

佐々木秀道

發行者

東京市神田區錦町三丁目九番地

福田作太郎

印刷者

東京市芝區南佐久間町二丁目九番地

中村彌三郎

發行所

東京市神田區錦町三丁目九番地

圖書協會





173